平成18年9月1日発行　明治31年4月20日　第3種郵便物認可（毎月1回1日発行）　第152巻　第6号　ISSN 0287-2706

THE RISING GENERATION

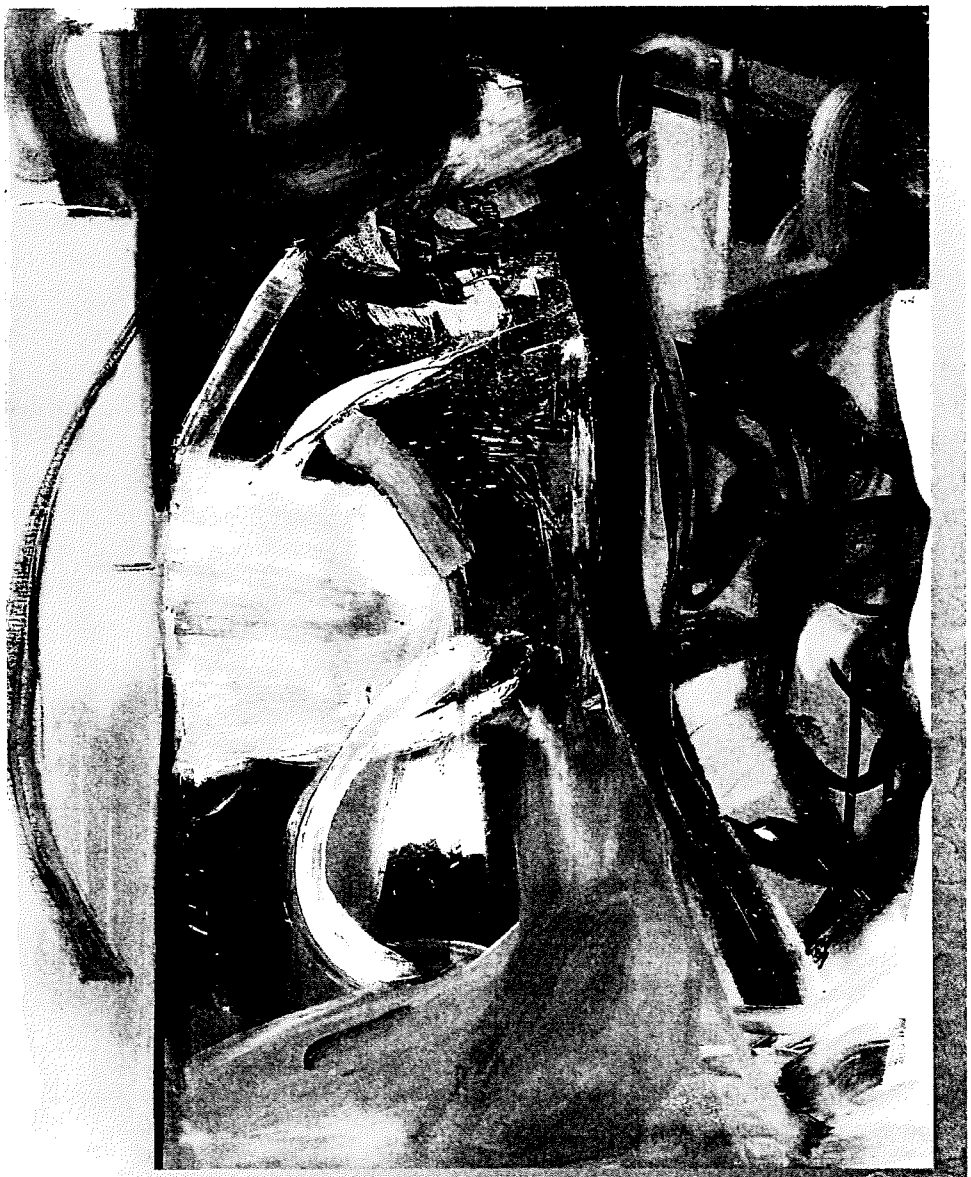
2006
September
9
総号1891号

英語青年

特集：ヘンリー・ジェイムズ

特別記事：Charles J. Fillmore 教授に聞く

連載：医学と英文学／英文法研究：理論と事実の接点を求めて／〈訳注式〉英語詩演習
辞典・事典の愉しみ／訳者と読むこの1冊



Peter Lanyon, *Lost Mine*, 1959

KENKYUSHA

英語青年

THE RISING GENERATION

第152巻 / 第6号 (総号1891号)
平成18年9月1日発行　明治31年4月創刊

目　次

特集　ヘンリー・ジェイムズ

ヘンリー・ジェイムズの捜しもの
……折島　正司　322
ヘンリー・ジェイムズの「視点」
……佐々木　徹　325
ヌスバウムのジェイムズ批評……平石　貴樹　328
どこからが超自然?——Henry James の短篇小説考……水野　尚之　331
『ボストニアンズ』に見るホモエロティックな読みの可能性……本合　陽　334
〈テロリストの身体〉のその後——『カサマシマ公爵夫人』の終わり方……竹村　和子　337
巨匠の郷愁——崩壊と再生——*The Finer Grain* (1910) の自伝的要素について
……市川美香子　341

● 特別記事
第4回国際構文理論学会開催記念
Charles J. Fillmore 教授に聞く
……聞き手・翻訳: 長谷川葉子 / 小原京子　354

● 連　載
英文法研究: 理論と事実の接点を求めて (6)
——方言から言語理論へ(下)……村杉　恵子　345
〈訳注式〉英語詩演習 (54): Henry Wadsworth Longfellow, 'Snow-Flakes'——静かに降りつむ白い象徴……澤入　要仁　360
医学と英文学 (6)——身体化された医学理論 [最終回]……鈴木　晃仁　362
訳者と読むこの1冊——トマス・ディクソン・ジュニア『クー・クラックス・クラン　革命とロマンス』……奥田　暁代　370
辞典・事典の愉しみ (6)——語法辞典から学ぶこと……浦田　和幸　372

● 海外新潮
WWW in the Seventeenth Century…川田　潤　349
淫靡な文学を語ろう……中島　渉　349
ポウプと奴隷制……福本　宰之　350
モダニズムの諸相……余田　真也　351
正義なき「和解」の真実……溝口　昭子　352
教育的文体論を考える……奥　聡一郎　352

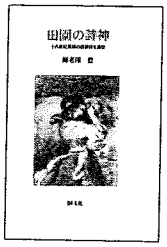
● Book Review
新刊書架
河合祥一郎著『シェイクスピアの男と女』(「中公叢書」)(上野美子)——海老澤豊著『田園の詩神——十八世紀英国の農耕詩を読む』(笠原順路)——山口ヨシ子著『女詐欺師たちのアメリカ——19世紀女性作家とジャーナリズム』(進藤鈴子)——池内靖子・西成彦編『異郷の身体——テレサ・ハッキョン・チャをめぐって』(小林富久子)——小西友七編『現代英語語法辞典』(安藤貞雄)
……365

英文解釈練習……行方　昭夫　374
和文英訳練習……上田明子 / Thomas F. Mader　376

CORNERS……353
片々録……379
表紙について: セントアイヴズの画家たち (6)
……阿部公彦　359
Peter Lanyon, *Lost Mine* 1959, 182.8×152.4cm, 油彩、キャンバス。Tate, London 2006. ©Sheila Lanyon.　装丁: 広瀬亮平。
次号予告……383

＊　今月は「リレー連載: 英語・英文学・英語学教育を考える」、'Eigo Club' は休載いたします。

海老澤　豊 著
『田園の詩神――
十八世紀英国の農耕詩を読む』



我々文学研究者にとって、参考文献とは高度な機密情報である。自分がネタ本としている秘蔵の文献を、他の研究者が利用しているのを知った時、その研究者へのライバル意識と、密かな尊敬の念とが湧きおこるものだ。まず本書の参考文献をパラパラとめくっていて、Raymond Dexter Havens, *The Influence of Milton on English Poetry* (1922) を発見した時、私の内部にはこの二つの感情が起こった。ワーズワス研究家ならヘイヴンズの名を知らない者はいないはずだ。*The Mind of a Poet* (1941) という浩瀚な『序曲』の研究書がある。だが、ヘイヴンズがミルトンの 18 世紀詩への影響に関する研究からワーズワス研究に移行したということを知っているロマン派研究者はそう多くはないだろう。もっとも「ミルトンの影響」とは、看板に偽りありと言うべきで、私はこの本を 18 世紀詩の網羅的な解説書として座右に置いている。私も、先の編著書では両方を文献一覧に挙げた。が、海老澤氏の本には前者が単独で出ている。これは相当やるな、と思った。

ヘイヴンズが殆ど全ての 18 世紀詩をミルトンの影響下という自分の土俵のなかに入れ込んでしまったのと同じように、この著者も、農耕詩という大きな風呂敷のなかに一見農耕詩とはいい難い作品まで包み込んでいるようだ、と序章の作品一覧だけを見て思った評者が、ポープ『ウィンザーの森』の章を見ると、「「ウィンザーの森」を農耕詩と呼ぶことには抵抗を感じざるをえない...この作品には労働や技術に対する信仰が感じられず...薀蓄を傾けるべき教訓はまったくない」とあり、トムソン『四季』の章を見ると、「「四季」が純粋な農耕詩ではなく、さまざまな要素の混在する重層的な作品である」とあり、またクーパー『課題』の章には「「課題」を農耕詩と呼ぶことができるかという問題について...端的に言えば答えは否である」とあって、ひとまず安堵の胸をなでおろした。では農耕詩とは何か。序章に曰く、「農耕詩は猥雑な様式なのである。ソファの発達の歴史...など、実に多様性に富んだ話題があまり脈絡もないままに次から次へと披露され、読者の好奇心と驚きを誘う。これらの雑多な話題が積み重ねられるのも、自分たちが存在する世界を包括的に認識しようという意図の表われなのだが、いつしかわれわれの目の前には、十八世紀のロンドンをいそいそと歩き回る詩人や、熱帯の気候や自然に感嘆しながらも、農園経営に心を砕く医師の姿が浮かび上がってくるのである」と。いつしか目の前に浮かび上がってくるものまで農耕詩の範疇に入れることの適否はさておき、本書副題にいう「農耕詩」とは、「農耕詩的要素を少しでももった詩、またはそのパロディ」という意味にまで拡大解釈して読めばいいのだろう、と頷いた。

遅れたが、本書の構成を示しておこう。まず序章でウェルギリウス『農耕詩』から説き始め、ドライデンの英訳とアディソンおよびその他の 18 世紀の農耕詩論を序章にあて、以後、ジョン・フィリップス『林檎酒』からウィリアム・クーパー『課題』に至る計 15 編の、著者の定義によるところの農耕詩を手際よく論じ、「農耕詩の終焉」と題する終章でジョンソン博士、ゴールドスミス、クラッブにふれ、農耕詩が解体されてゆく過程をたどっている。(15 編のうち上述の 4 編を除く 11 編は次の通り――スウィフト「街の驟雨の情景」、ゲイ『田園の狩り』、ゲイ『トリヴィア』、サマヴィル『狩猟』、アームストロング『健康維持法』、スマート『ホップ農園』、ドズリー『農業』、ダイヤー『羊毛』、グレィンジャー『砂糖黍』、ジェイゴー『エッジ・ヒル』、メイソン『英国の庭園』)

と、一応、概略はこうなるのだが、本書における海老澤氏の基本的な姿勢および真骨頂は、副題にもあるとおりこれら 15 編の詩を「読む」ということに徹している点だ。しかも著者が楽しんで読んでいて、それが確実に読者に伝わってくるのがいい。さらに、本書に扱われた詩の殆どは語注はもちろんのこと、先行研究も極めてすくなく、氏が自力で読破した跡が行間ににじみ出ている。例えば、ダイヤー『羊毛』の章で、教訓から描写への転換を指摘している箇所などは、テキストをしっかりと精読することができなければ、こうした解説は不可能である。(但し、ダイヤーの生家の記述は疑問だが...)いずれにせよ今後の 18 世紀詩研究の道標となるべき本である。

本書はしかし、ただ詩を「読む」だけではない論旨においても存在意義がある。農耕詩の興隆と衰退に関する著者の見解を紹介しておこう。著者は、農耕詩が 18 世紀に栄えた理由として、チョーカー、ドゥーディ、ティロットソンらの説を紹介しつつ、それに加えて、ミルトン以降、新たな叙事詩を生み出すことが困難になり、いわばその代替として、農耕詩を目指すようになった、と自説を展開する。また、18 世紀末に農耕詩が衰退した理由として、「新歴史主義あるいはカルチュラル・スタディーズを信奉する批評家たち」とは反対に、詩人の内在的な要因として、「第一に農耕詩の代表的な詩形であるブランク・ヴァースと、農耕詩特有の生硬な語彙に対する違和感が強まったこと...第二に農耕詩の持つ教訓的な性格が読者に受け入れられなくなり、逆に本来は教訓に従属するはずの描写的・物語的な側面が重みを増したこと...第三に農耕詩の持っている公的な性格が、詩人にとって負担に感じられるようになってきたということ」を挙

げる。

あと、気のついた点を一つだけ述べておきたい。著者は英語ならばdescriptive poemと表現される概念に「描写詩」という日本語を当てている。従来「叙景詩」という語の方が一般的だが、このdescriptionが叙景(=風景描写)に限らないということを熟知している著者ならではの用語であろう。卓見である。

とまれ、久々に本格的研究書を楽しく読ませていただいた。また勉強にもなった。これは、楽しませて教えることの出来る本だ。(国文社、2005年8月、四六判376頁、3,500円)

——笠原　順路

山口ヨシ子 著

『女詐欺師たちのアメリカ——

19世紀女性作家とジャーナリズム』

著者によれば、女詐欺師(コンフィデンス・ウーマン)とは「信頼(コンフィデンス)」を盾に金品をだましとる「男(マン)」を意味する「コンフィデンス・マン(詐欺師)」の女性への転用だという。19世紀中葉まで、服従する女性を称揚する「家庭小説」がベストセラーになっていた一方で、父権的な社会やシステムに対して「反抗する」ヒロインも登場し始めていた。女性のおかれた社会の底部から少しでも這い上がろうと画策するヒロインの姿に、相手を騙して裏をかき、最終的には求めていたものを獲得してしまう詐欺師たちの姿をみようとしたのが本書である。

序章においてコンフィデンス・マンの原型がニューイングランドの行商人や、旧南西部のほら話や自伝的滑稽話の敵役として登場する人物として想定され、その類似性や発展的属性を検証しながら、文学作品の中の女詐欺師たちが紹介されていく。

第1章から第3章までは「家庭小説」の隆盛期に発表された作品が主題となっている。第1章においては、1859年から1883年までに三度にわたって週刊新聞『ニューヨーク・レジャー』に繰り返し連載されたE・D・E・Nサウスワースの『見えざる手』が取り上げられている。この作品の新奇性は、全体的には「家庭小説」の枠組みを踏襲しながら、主人公キャピトーラ・ブラックが、ジェンダーを超える変装を駆使して、騙される側の権威を落とし、ユーモアや風刺を提供するという非伝統的な手法にある。

第2章においては、1851年から翌年にかけて週刊新聞『ナショナル・イーラ』に連載され、世紀のベストセラーと言われた『アンクル・トムの小屋』が扱われている。しかし、詐欺師の役割を果たすのは、「典型的なヴィクトリア朝のヒロイン」のような主人公トムではなく、物語が約8割終了した時点で登場する女奴隷キャシーである。彼女が「キリスト教の愛を基本とする女の世界」の連帯を通じて「奴隷制の悪に対抗できる可能性を示唆」した女詐欺師として検証されている。

第3章においては、『若草物語』によって少女小説家としての地位を確立する数年前に、ルイザ・メイ・オルコットが匿名で大衆週刊新聞『フラッグ・オブ・アワー・ユニオン』に投稿した二作品が分析されている。『V・V: 策略と逆計』(1865)及び『仮面の陰で』(1866)に登場する二人の「悪女」が、労働による女性の自立を制限する価値観の中で、生き残るための職業として女詐欺師になっていく姿が捉えられている。

最後の2章で扱われる作品は、20世紀初頭、すでに「新しい女」の概念がマスメディアを賑わしていた頃のものである。第4章で扱われる『ベニグナ・マキャヴェリ』(1914)は、1970年代に「黄色い壁紙」で再評価を受けたシャーロット・パーキンズ・ギルマンが自作品専用に自主発刊していた月刊誌『フォアランナー』に掲載されたものである。著者は主人公ベニグナを「二つの名前を使い分け、本来の自分を隠して他人を操るという行為」に長けた女詐欺師として評価している。

第5章では、「もっとも嫌悪感を起こさせるヒロイン、怪物のようで、人間とは思えない」と評されたイーディス・ウォートンの『国の慣習』(1913)のヒロイン、アンディーン・スプラッグが分析される。「国の慣習」とは、アメリカ男性が社会的、経済的権利や機会を女性と共有することなく、ただひたすら女性のために金を稼ぐという伝統のことである。アンディーンは、その慣習を逆手にとって、結婚という制度の内外で美しい自分の身体を武器にして、絶対的な資産保有権をもつ男性社会に奸計をもって挑む女詐欺師と解釈されている。

著者は、これら「悪女」の詐欺行為の誘因に、女性を抑圧する社会に対する遺恨と義憤をみている。また、同様の感情をもった女性作者自身が、大衆小説、プロパガンダ小説、センセーショナル小説等と呼ばれる作品を大衆メディアに掲載することにより、男性中心の伝統的純文学界とは別の商業文学世界を構築していく過程が解明されている。19世紀半ばから勃興した大衆週刊新聞が女性作家の経済的自立を助け、その広汎な流通が女性読者層の拡大に果たした役割も詳細かつ丁寧に論じられている。19世紀半ばから20世紀にかけて存在した、こうした恐ろしい女の物語を掘り起こし(特に、煽情的ミステリー作家としてのオルコットの姿が明らかとなり、『ベニグナ』が単行本になったのはここ数十年のことである)、その背景となる父権社会の闇を照らした本書は、またひとつアメリカ文学史の隙間を埋めてくれる文献となるであろう。ただ、検証されるヒロインたちは「女詐欺師」のカテゴリーをはるかに超え、男たちに戦慄と恐怖を与え、社会の転覆を謀りかねないシリアスさを備えていることは強調しておかねばならない。(彩流社、2006年3月、四六判318頁、2,800円)

——進藤　鈴子

新刊書一覧

(出版社の五十音順、本体価格)

〈英米文学・文化論〉

『英国小説研究　第 22 冊』『英国小説研究』同人著、2006 年 5 月、B6 判 178 頁、1,900 円、英潮社。

『オセアニア研究　第 17 巻』オセアニア英語研究会編、2006 年 5 月、A5 判 56 頁、1,200 円、オセアニア出版社。

『十八世紀イギリス文学研究 [第 3 号]——躍動する言語表象』日本ジョンソン協会編、2006 年 5 月、A5 判 viii＋414 頁、5,000 円、開拓社。

『アメリカの理想都市』入子文子著、2006 年 3 月、A5 判 xiv＋240 頁、3,500 円、関西大学出版部。

Robert Frost in Quest of Wholeness and Order, Limited Edition, 平山千鶴子著、2006 年 4 月、B5 判 72 頁、頒価 1,000 円、晃学出版。

『読書する女性たち——イギリス文学・文化論集』出渕敬子編、2006 年 3 月、A5 判 416 頁、4,800 円、彩流社。

『声に出して覚える英語の詩 50 選』田中安行著、2006 年 4 月、四六変型判 240 頁＋CD、1,500 円、中経出版。

『愛の絆——サミュエル・テーラー・コールリッジ夫人の生涯』モリー・レフェビュア著、青山富士夫訳、2006 年 5 月、A5 判 460 頁、2,800 円、北星堂書店。

『現代演劇と文化の混淆——オーストラリア先住民演劇と日本の翻訳劇との出会い』佐和田敬司著、2006 年 3 月、A5 判 x＋380 頁、5,400 円、早稲田大学出版部。

〈英語学・英語教育〉

『ことばは生きている——選択体系機能言語学序説』龍城正明編、2006 年 5 月、A5 判 xii＋164 頁、2,400 円、くろしお出版。

『オセアニアのことば・歴史』岡村徹著、2006 年 5 月、B6 判 x＋206 頁、1,800 円、溪水社。

『沖縄語辞典——那覇方言を中心に』内間直仁・野原三義編著、2006 年 5 月、四六判 xxxvi＋408 頁、3,200 円、研究社。

『プラグマティクス・ワークショップ——身のまわりの言葉を語用論的に見る』田中典子著、2006 年 5 月、B5 変型判 viii＋164 頁、1,800 円、春風社。

『新版　入門コミュニケーション論』宮原哲著、2006 年 5 月、A5 判 x＋248 頁、2,300 円、松柏社。

『4 次元認識の文構造——スペイン語の場合』酒井優子著、2006 年 5 月、A5 判 xiv＋206 頁、1,500 円、リーベル出版。

Textual and Contextual Studies in Medieval English: *Towards the Reunion of Linguistics and Philology* ('Studies in English Medieval Language and Literature' 13), Michiko Ogura (小倉美知子) 編、2006 年、viii＋216 頁、€39.00, Peter Lang.

〈翻訳(文芸作品のみ)〉

『クック　南半球周航記(上・下)——新たな世界周航戦略の実践』(「シリーズ　世界周航記」3～4) 原田範行訳、(上) 2006 年 4 月、四六判 x＋274 頁、3,400 円、(下) 2006 年 6 月、四六判 x＋284 頁、3,500 円、岩波書店。

『イギリス・ルネサンス恋愛詩集』大塚定徳・村里好俊訳、2006 年 5 月、A5 判 360 頁、3,333 円、大阪教育図書。

『尖塔——ザ・スパイア』ウィリアム・ゴールディング作、宮原一成・吉田徹夫訳、2006 年 5 月、四六判 322 頁、1,800 円、開文社出版。

On Two Shores: *New and Selected Poems* (『二つの岸辺』), Mutsuo Takahashi (高橋睦郎) 作、Mitsuko Ohno (大野光子), Frank Sewell 英訳、2006 年 4 月、iv＋134 頁、€12.00, The Dedalus Press.

● 編集後記　6 月号で「苦手な作家」のアンケートを実施したときに、「こんな回答も出てくるのではないか」とひそかに期待していたタイプの回答がありました。それは、「ジェイムズは英語が難しいので苦手」というような、英語の難易度を基準にして、「苦手意識」を説明するような回答です(残念ながら、というべきか、日本の英文学者にとっては、幸いなことにというべきか、そういう回答はゼロでしたが)。▲ ジェイムズが難しい、というのはいわば英文学界の常識のようなものです。語りの複雑な構造であるとか、結局、幽霊は出たのか出なかったのかよく分からないとかいうような解釈以前の問題として、そもそも英文読解レベルでつまずいてしまう。たとえば、22 頁に引用されているジェイムズの英語がそうですが、否定表現、比較表現、仮定法、つまりは私たち日本人がとくに苦手だということになっている文法事項が、複雑に組み合わさっていて、少なくても筆者には一読してスラスラとは意味がとれなかったのです。ジェイムズの文体を本当に楽しむことができるようになるためには、相当の修練が必要なのだろうなと思わざるを得ません。▲ ある所で知ったのですが、某先生の「恩師」が、定年を迎えたあと、呆け防止のために、昔出版した翻訳を徹底的に再点検して、もう一度今の自分の力でやり直すという作業にとりかかっているのだとのこと。筆者の推測が間違っていなければ、その「恩師」とは、あるジェイムズ研究者を指すはずなのですが、あの第一人者にとってすらそうなのか、と思ってしまいます。▲ 来月は「精読」特集です。

英　語　青　年

9　月　号

第 152 巻　第 6 号

平成 18 年 9 月 1 日発行

定価 1200 円 [本体 1143 円]

(送料 84 円)

編 集 人　津　田　　正

発 行 人　関　戸　雅　男

印 刷 所　研究社印刷株式会社

発 行 所　株式会社 研 究 社

〒102-8152 東京都千代田区富士見 2-11-3

電話：03-3288-7740 (編集)　03-3288-7777 (営業)

Fax：03-3288-7832 (編集)　振替 00150-9-26710

E-mail: seinen@kenkyusha.co.jp

© 株式会社 研 究 社 2006